

思索の森の落ち葉を踏みしめながら「君の愛読書を教えて」と

言ってしまったら私たちの関係はどう変わるのか、私なりに一週間考えた上での少し照れくさい結論としての君に奨める濫読

校長 久保田範夫

この原稿を書こうとして私の部屋の書棚をぼんやりと見ていたら、読書関連の本が何冊か目に付いた。

○ 加藤周一『読書術』（岩波同時代ライブラリー）

○ サマセット・モーム『読書案内』（岩波新書）

○ 清水幾太郎『本はどう読むか』（講談社現代新書）

○ 山内昌之『「反」読書法』（同右）

古来、多くの先人達が様々な読書論を残しているが、いつの時代でもニーズが多いからなのだろう。今回は、私の経験と読書の一つの在り方について紹介したい。

私にとっての読書とは、自分自身を見つめて自分を探し続ける旅そのものである。したがって、自分の読書歴を辿ることは、私の生涯の各時点において自分が何を求めていたかを確認することにもなるので、簡単に振り返ってみたい。

幼少期は、母親から読んでもらった絵本と祖父母の昔語りという、主に耳から入った読書が幽かな記憶として残っている。小・中学校時代は、好きな女の子が読んだ本を学校図書館で見つけて読むという、動機としてはかなり不純なものであったが、彼女たちのおかげで良質な童話や児童文学に触れることができた。高校時代から大学の教養課程にかけては、文字通り「濫（乱）読」の時代であった。田村市から郡山まで、列車通学（当時は

「汽車通」と言った）の往復約二時間、「赤尾の豆単」や「試験に出る英単語」（CDが付き改訂されたが、現在も売れ続けて約千五百万部を売り上げているらしい）で勉強していた安積の他の生徒を横目に、一〇二日に文庫本一冊のペースで読んでいた。（因みに、一級上の理系の先輩の勧めもあり、帰宅後は評論系の新書を読み、違うジャンルの本を並行して読むようになったが、基本的に現在もその読書スタイルは変わらない。）

当時、星（☆一〇〇円と★七〇円）昭和54年から五〇円）の数で値段を表示していた岩波文庫を中心に、片っ端から読んだのである。ディケンズの『デイヴィット・コプフィールド』に感情移入し、カミュの『異邦人』に驚き、『カラマーゾフの兄弟』の信仰告白に打ちのめされた。また、実存主義の先駆者とも言えるパスカルの『パンセ』にのめり込んだのもこの時期であった。中原中也の歌うような詩のリズムと萩原朔太郎の艶めく繊細さに酔い、伊藤静雄の硬質な抒情と宮沢賢治の光と風のエネルギーが溢れる詩と「風の又三郎」等の童話に心を洗われた。

小説では、華麗な三島由起夫の文体にあきれ、カフカを思わせる安部公房の不思議な世界に迷い込み、森鷗外の後作『洪江拙斎』の緻密さに退屈しながら（！）驚嘆し、女性の描き方に少し物足りなさを感じながらも「美弥子」「藤尾」に憧れつつ、文庫化されていた全ての漱石作品を読破した。さらに、この時期、歴史関係（特に日本と日本人の心の歴史に関わるもの）の本を漁るようにして読んでいた。このように、十五歳〜二十歳は、アイデンティティーを確かなものとするべく、興味関心の赴くままの読書生活を送ったのである。

さて、国語教師となつてからの読書はどうなったのか。仕事柄、どうしても教科書掲載の教材と関連した作品や、オリジナル試験問題作成のための素材となりそうなものを読むといった、「〴〵のための読書」が多くなつ

てしまった。ただ、それ自体悪いことではなく、高校時代には読まなかった吉野弘の誠実な詩に出会うなど、収穫も多かったのである。

ためにする読書以外で、この頃に出会った本の中では、辻邦生『ある生涯の七つの場所』（全八巻・中公文庫）を文字通り寝食を忘れて読みふけた記憶がある。「霧の聖マリ」から「椎の木のとおり」まで、多くの短編が集まって一枚のタペストリーを織り成す壮大な小説であり、一人の人間の人生が、決して単線の物語ではあり得ないように、一つ一つの出来事が多角的に描かれる。懸命に生きる一人一人の人間がこの世界を構成している、誰もが脇役ではないことを実感させてくれる小説である。

その後、子供が成長し一人の父親として、子どもたちが喜び自分が読んでもおもしろい本を探すようになり、ハリー・ポッターシリーズを家族五人が先を争うように読んだ時期もあった。日本語訳が出る前、待ちきれずに原書で挑戦したりもしたが、英語力の問題もあり遅々として進まなかった記憶がある。

そして、約十年前に我が家でブームになっていたのが「ライラの冒険シリーズ」である。作者はウエストミンスター大学で英文学を教えるフィリップ・ブルマン。九五年に英国で刊行され、「カーネギー賞」等数々の賞を受け、「今世紀最後の大ファンタジー」と言う人もいる由。（五年前には、日本で映画も公開されている。）

このシリーズは『Ⅰ 黄金の羅針盤』、『Ⅱ 神秘の短剣』、『Ⅲ 琥珀の望遠鏡』の三巻構成。あまり詳しく紹介して読む楽しみが薄れても困るので、どんな本かイメージできる程度に書いてみると・・・。

オックスフォード学寮の十一歳のライラ。おじさん（本当は・・・）のアシリエル卿。様々な小動物に姿を変え人間から一生離れないダイモン。武器である鎧を身につけ知性を持つ北極熊。オーロラの向こうに見える謎の都

市と正体不明のダストの存在。真理計（アレシオメーター）……

単なる冒険ものでなく、人間存在や宗教についても考えさせられる、ハリー・ポッターシリーズ以上に高校生向きの作品である。この冬、ワクワクする本に出会いたい人は是非一読を。

話が少し横道にそれてしまったが（―まるで脱線ばかりしている嘗ての私の現代文の授業のようである―）、私の読書歴の大まかなところを振り返りながら改めて気づかされたことがある。それは再読、三読ということである。漱石と賢治は最も好きな作家なので、一生つき合うことになるはずだが、他の作家でも、ふと読み返したくなる時がある。五十歳も半ばを過ぎた今、ドストエフスキーの大作や、父斎藤茂吉を含め斎藤家三代の歴史を描く北杜夫の大作『楡家の人々』などを読めと言われても、一度も読んだことがない作品については、読破しようというエネルギーはないということである。言い換えると「読書エネルギー」が最も高まっている（はずの）高校時代に一度読んでいるから、再読しようという気持ち起きるのではないか。そして、再読してみたら、十代では見えなかった新たな魅力を発見することも多々あるのだ。

安積で学ぶ君たちに、私自身が経験し多くの先人たちもその効用を認める「濫読」を勧めたい。「濫読」する時間などないと言うかも知れないが、それは誤りである。確かに安積の生徒のみならず高校生は忙しい。日々の授業、課外、部活動、予習復習……。しかし、生活のリズムの中にわずか三十分であっても読書の時間を組み込んでしまうと、その時間が大きな喜びとなるはずであり、それは後々、君たちの人生に香り豊かなスパイスとなって甦ってくるのである。